

## 弔辞（故 山内道雄氏）

本日ここに、皆様のお許しを得て、故山内道雄様の御霊に対し、謹んで哀悼の言葉を申し上げます。

私共は、山内さんとは十六年間の長きにわたり一緒に仕事をさせていただきましたが、お別れの言葉ひとつ交わすこともできぬままお亡くなりになりましたことは、誠に惜しみても、なお惜しみ足りない気持ちであります。

山内さん、これが見えますか。山内さん直筆の色紙を町長室から持参しました。「先憂後楽」です。

単独町政の選択の直後に交付税の大幅カット。まさに島の存亡の危機に直面、暗雲立ち込める中で、職員と共に皆で乗り切ろうと全職員を集めて、給料の大幅カットを説明した時のものです。

天下の事を人よりも先に憂い、人よりも後れて楽しむ事。「先憂後楽」は、まさに、山内さんの生き様ではなかったかと、今改めて、四期十六年に亘る激動の町政を思い起こしています。

山内さんは、平成七年四月に海士町議会議員に初当選しました。そして、平成十三年には異例の早さで議長に就任されましたが、翌平成十四年の春、議員を辞して町長選挙に臨み初当選。第三十代海士町長に就任されました。

山内さん、町長就任直後の職員への訓示の一節です。「役場は住民総合サービス株式会社である。町長は社長、助役は専務、管理職は取締役、職員は社員で、町民は税金を納めた株主であって、そのサービスを受ける顧客、即ちお客様である。従って、地域経営は企業経営と同じである。」

当時職員だった私は、気迫のこもった気概溢れるリーダーの誕生を確信しました。

また同時に、これから行政が大きな変革を求められ、役場がより良いほうへ大きく変わるような予感とワクワクする期待感を抱いたことを今でも鮮明に記憶しております。

そして、「自立・挑戦・交流」を町政の指針に掲げ、課長以上で構成する経営会議の導入をはじめ、年功序列の廃止や現場主義を唱えた適材適所の組織再編など、これまでの行政では到底考えられない様々な改革を矢継ぎ早に打ち出し、スピード感を持って実践されました。

また、平成の市町村合併の嵐が襲いかかる中、「自立への道」を選択した平成十五年の十二月。覚悟の単独町制を決断され、「自分たちの島は自ら守り、島の未来は自ら築く」という強い信念の下、官民が一体となって「海士町自立促進プラン」を策定し、島の生き残りをかけた大改革が始まりました。

それは、徹底した行財政改革で「守り」を固める一方、「攻め」の方策として新たな産業創出を強力に推進する、両面作戦の展開でありました。

「守り」では先憂後楽の精神に倣い、山内町長自ら最大で五十パーセントの報酬カットを打ち出され、それに続けと、議員並びに職員も未来への先行投資という考えの下、自発的に給与カットに踏み切り、国の三位一体改革に立ち向かって行きました。

改めて思い起こしますと、こうした気骨のある町長の存在と行動力で、身を切る改革を実行したからこそ、町民と危機意識を共有でき、町民と共に大胆な改革を断行できたものと確信するところであります。海士町の改革の原点は、この「身を切る改革」にあったと言っても過言ではありません。まさに激動の時代を乗り越えてきました。

一方、「攻め」の戦略では、島まるごとブランド化を提唱され、地域資源を活かした第一次産業の再生で、雇用の場を創出し、外貨を獲得するため、島の成長を外部に求め、島の活性化に取り組みられました。

先ず、攻めの実行部隊となる産業三課を町の玄関、キンニャモニャセンター内に新設し、現場第一主義で産業振興と定住対策に取り組みられました。

海士町成長産業の要となる「いわがき春香」の養殖産業や旬感凍結C A S事業をはじめ、隠岐牛のブランド化や干しなまこの輸出事業、離島キッチン事業など、産業振興に先駆的に取り組む一方で、島外から移住してきた若者の不安に寄り添い、我が子のように可愛がり、若者が挑戦しやすい環境づくりに尽力されました。

そして、「町づくりの究極は人づくりにある」と、平成十九年度を「未来を支える人づくり元年」と位置づけ、日本一の教育を掲げた取り組みを新たに始められました。

当時、少子化の波と島内生の流出により、廃校の危機にあった隠岐島前高校を、「島前地域唯一の県立高校をなくしてはならない」、「ピンチは変革と飛躍へのチャンスだ」との強い信念の下、島前三町村と高校が連携して島前高校魅力化プロジェクトを立ち上げられ、「島留学」と銘打ち全国から意欲ある生徒が集まる魅力ある高校づくりに尽力されました。

また同時に、公営塾隠岐國学習センターの設立や、国の関係機関に対して法改正を訴え、教員の加配措置の実現に多大なる貢献をされました。今日に至っては全学年の二クラス化と適正な教員の配置が実現でき、地域再生の先進的事例として全国から高く評価をされています。今振り返ってみますと、教育にかかわらず、こんなにたくさん国会議員や省庁に対して要望活動を行った町長は、山内さん以外にはいなかったのではないのでしょうか。

こうしたものづくりや人づくりの取り組みが実って、海士町には現在、八百数十名の移住者が集い、園児や児童の数も増加するなど、人口減少に一定の歯止めがかかり、各集落の活気が戻ってきつつあります。

まさに、山内さんは、地方創生のトップランナーとして、島内外に海士町の名声を轟かせた立役者でした。ご功績を挙げようと思えば枚挙にいとまがありませんが、これだけの数々の実績を成し遂げられた背景には、山内流のふれあいや交流、ネットワークづくりがあったと私は思っています。

宴席での乾杯には承久の宴が付きものでした。「私には癖があるが、この酒には癖がない。」と、ユーモアを込めて紹介し、緊張感を取り払い和やかな雰囲気づくりに努めようとしまし

たね。

涙もろく、相手の話に耳を傾け町民や職員にも気遣う配慮を欠かしませんでしたね。

場が盛り上がってくるとお客様にカラオケを勧め、自らの定番は八代亜紀の「愛の終着駅」で美声を放ちましたね。

さらに調子が出ると、自ら頬かぶりをして踊りだす芸達者な一面は、お客様を大いに喜ばせ、笑顔にさせましたね。

宴席が終わりに近づくと、平成の唱歌「ふるさと」をみんなで大合唱。「志を果たしに」のところは、特に力を込めて歌いましたね。

締めには、「気合いだ十連発」で、参加者全員に気合いを入れて下さいましたね。皆の心が一つになる瞬間でした。

山内さん、山内さんは全てにおいて、相手の心を慮る人柄、その人情味に多くの人が集まり、今の元気な海士町が存在しているのだと思っています。山内さんの町民の心に寄り添い行動する精神「<sup>そくいん</sup>惻隱の情」は、私たちがしっかりつないでいきます。

再び、山内さんと相まみえることは叶いませんが、山内さんのご遺徳と幾多のご功績は、海士町政に携わる者並びに海士町民の胸に永久に生き、永く称えられることでありましよう。

惜別の念は尽きませんが、ここに謹んで哀悼の意を表し、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

終わりに、昭和四十三年誕生、海士町民歌の三番目の歌詞を、山内さん、一緒に朗読してお別れの言葉と致します。

心ひとつに結び合い 理想を目指すまちづくり  
港に里に息吹も若く 躍進の意気たからかに  
我が海士町よ 栄あれ

山内さん、海士町をいつまでも天国から見守って下さい。本当にありがとうございました。安らかにお眠り下さい。

令和六年一月五日

海士町長 大江 和彦

※「<sup>そくいん</sup>惻隱の情」: 他者へ深く寄り添う思いやりや共感の情のこと。藤原正彦氏著の「国家の品格」では、「惻隱こそ武士道精神の中軸」と言われています。